(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第66輯

# 加治・神前・畠中遺跡

都市計画道路貝塚中央線に伴う
南海単独立体交差化事業に伴う発掘調査報告書

1991. 3

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第66輯

# 加治（かじ）・神前（こうざき）・畠中（はたけなか）遺跡

都市計画道路貝塚中央線に伴う
南海単独立体交差化事業に伴う発掘調査報告書

1991．3

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会

# 序　　文

関西国際空港の建設にともなって、そのアクセスの一つである鉄道関連部分でも高架事業等の建設が急がれています。ここに報告致します貝塚市加治・神前・畠中遺跡の発掘調査も、都市計画道路貝塚中央線と南海本線の立体交差化事業に先だって行われたものです。本調査地周辺ではこれまで当協会で脇浜遺跡、畠中遺跡の発掘調査を行ってきており、縄文時代以降、各時代の遺構・遺物が発見されております。脇浜遺跡の砂丘部にある、古墳時代の竪穴住居址や大量の製塩土器、畠中遺跡の古墳時代の大型の竪穴住居址の発見は当地周辺の歴史を考える上で大きな成果となりました。

今回の調査地は先の二遺跡の中間にあたり、中世の掘立柱建物２棟が見つかりました。２棟の建物はほぼ同じ規模をもつ３×４間の建物で同時期のものではないかと考えられています。建物の性格等については、線路敷の下などの調査を待たねばなりませんが、とりあえずこの地域の歴史に新しい成果を加えたものと思います。この調査成果が今後、当地域の歴史を解明する一助となれば幸いです。

本調査を実施するにあたって、大阪府教育委員会、大阪府岸和田土木事務所、貝塚市、南海電気鉄道株式会社、地元自治会をはじめとする関係者各位に多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝をしております。今後とも当協会の事業に変らぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成３年３月

（財）大阪府埋蔵文化財協会
理事長　仁賀奈祐吉

# 例　　言

1．本書は、都市計画道路貝塚中央線に伴う南海単独立体交差化事業予定地内に所在する貝塚市加治・神前・畠中遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は南海電気鉄道株式会社の委託をうけ、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。

3．発掘調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課第２班技師木下亘が担当し、現地調査を平成２年　月　日より同年12月25日迄の約　ヶ月間行った。

4．発掘調査の実施にあたっては、大阪府岸和田土木事務所、貝塚市建設部用地対策室、貝塚市教育委員会及び地元関係各位の協力を得た。

5．発掘調査は国土座標第Ⅵ系を基準に４ｍメッシュの地区割りを行った。又これとは別にⅠ～Ⅳ区の呼称を併用した。

6．遺構写真は調査担当者が撮影し、空中写真は東日本航空株式会社が撮影した。

7．土層の色調については、「新版　標準土色帖」５版　1976年に準拠した。

8．遺物図版中の遺物個々に付した番号は、本文中挿図番号及び実測図番号を示す。

9．報告書の執筆・編集は調査担当者が行ったが、出土遺物については、当協会近江俊秀による。

# 本文目次

頁

序

例言

第Ⅰ章　調査に至る経緯……1

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境……1

第Ⅲ章　調査の成果……3

第１節　調査の方法……3

第２節　基本層序と遺物包含層出土遺物……7

1　基本層序……7

2　遺物包含層出土遺物……7

第３節　検出遺構と出土遺物……8

第Ⅳ章　まとめ……16

# 挿図目次

頁

第１図　調査区周辺地形図……2

第２図　調査地位置図……3

第３図　調査地区割り図……4

第４図　調査地セクション図……5～6

第５図　遺物包含層出土遺物実測図……7

第６図　遺構全体図……9～10

第７図　41－ＯＢ平・断面図……11

第８図　50－ＯＰ出土遺物実測図……12

第９図　74－ＯＢ平・断面図……12

第10図　28・29－ＯＳ平・断面図……13

第11図　95－ＯＯ平・断面図……14

第12図　95－ＯＯ出土遺物実測図……15

# 図　版　目　次

図版

1　第II区全景
2　1　調査区全景（南より）
　　2　調査区全景（北より）
　　3　調査区全景（南より）
3　1　41－ＯＢ全景（南より）
　　2　74－ＯＢ全景（南より）
4　1　95－ＯＯ全景（西より）
　　2　95－ＯＯ土層断面
5　1　28・29－ＯＳ全景（北より）
　　2　28・29－ＯＳ全景（東より）
6　出土遺物

# 第Ⅰ章　調査に至る経緯

加治・神前・畠中遺跡は、大阪府貝塚市加神一帯に広がる遺跡である。今回の発掘調査は、都市計画道路貝塚中央線に伴う南海単独立体交差化事業に伴い実施したものである。事業予定地内は、「大阪府文化財分布図」に、加治、神前、畠中遺跡として記載されており、事前に試掘調査を行い、遺跡の範囲、遺構の密度などを把握する運びとなった。この試掘調査の結果、その密度は多くないもののピット、溝、土坑などが若干検出されたため、特に遺構が集中する箇所を選定し、本調査を実施することとなった。

発掘調査は、事業予定地内の長さ約160m、面積1709㎡である。又、調査期間は1990年10月22日から同年12月25日迄の約２ヶ月間である。

# 第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

加治神前畠中遺跡は、貝塚市の西部に立地している。遺跡の南側には、和泉山脈に源を発する近木川が西北方向に流れ、大阪湾に注いでいる。遺跡は、近木川右岸に発達した段丘上に立地しており、標高は12m前後である。当遺跡の現状は、水田あるいは畑地として利用されている。調査地は、北西方向へなだらかな傾斜をもつ斜面地で、海浜部に向かって段々畑として開墾されている。

次に当遺跡をとりまく歴史的な環境について触れておこう。

貝塚市内の歴史的環境については、既に公刊された貝塚中央線関連の発掘調査報告で詳細に述べられており、ここでは、近接するいくつかの遺跡について述べる。

当遺跡西側の海浜部には、脇浜遺跡が立地している。脇浜遺跡では、砂堆上で古墳時代の建物等が検出され、それと共に多量の製塩土器・蛸壺形土器等が出土し注目を集めた。東側一帯には石才南遺跡が知られている。弥生中期の住居跡をはじめ、古墳時代の建物等も多く検出されている。特に初期須恵器が多量に出土する点でも注目すべき遺跡の一つである。この様に当地域には、多くの遺跡が広範に分布していることが、近年の調査で明らかになってきている。今後、調査の進展により、当該地域の遺跡の実態が、より多角的に解明されるものと思われる。

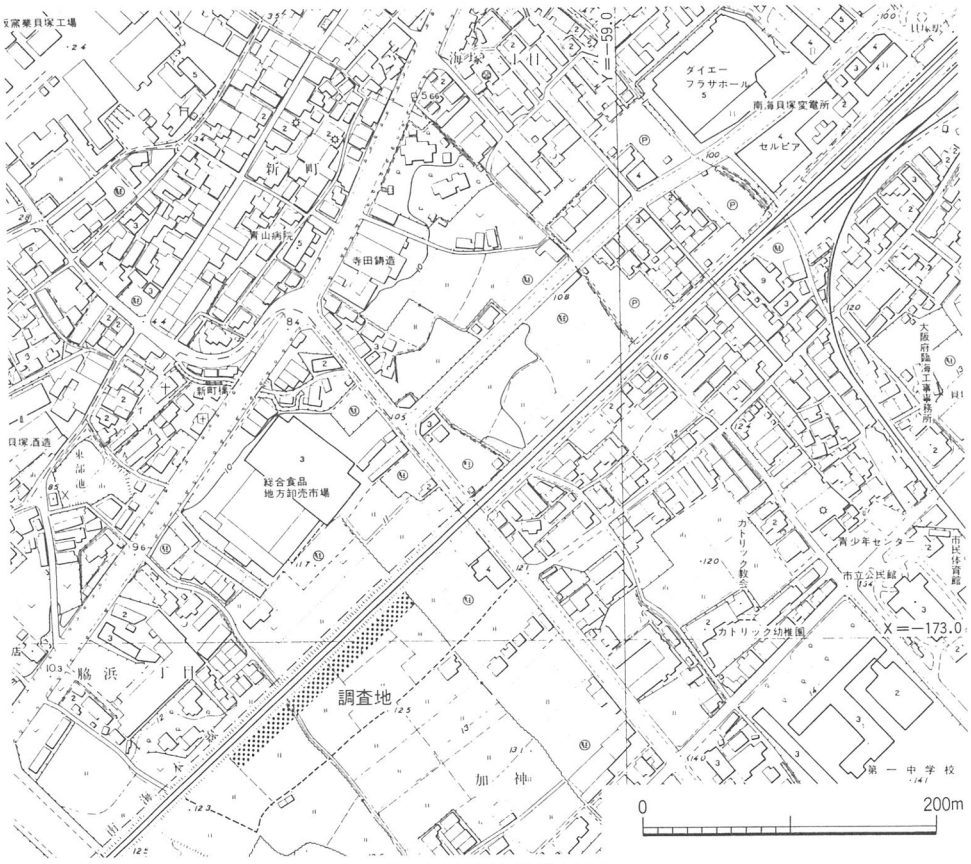
第１図　調査地周辺地形図

# 第Ⅲ章　調査の成果

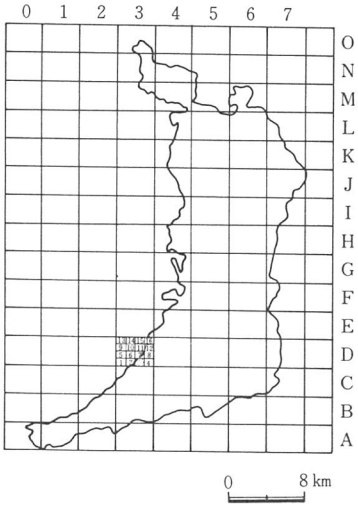
## 第１節　調査の方法

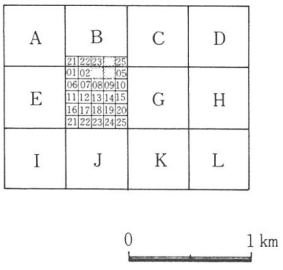
発掘調査にあたっては、国土座標第Ⅵ系を基準に４ｍメッシュの地区割りを行った。この区画は、大阪府発行新版1／2500地形図を基本にしたもので、包含層遺物取り上げの最小単位となっている。それと共に本遺跡では、調査地が農水路などにより分断されていることから、便宜上Ⅰ～Ⅳ区の名称を併用することとした。

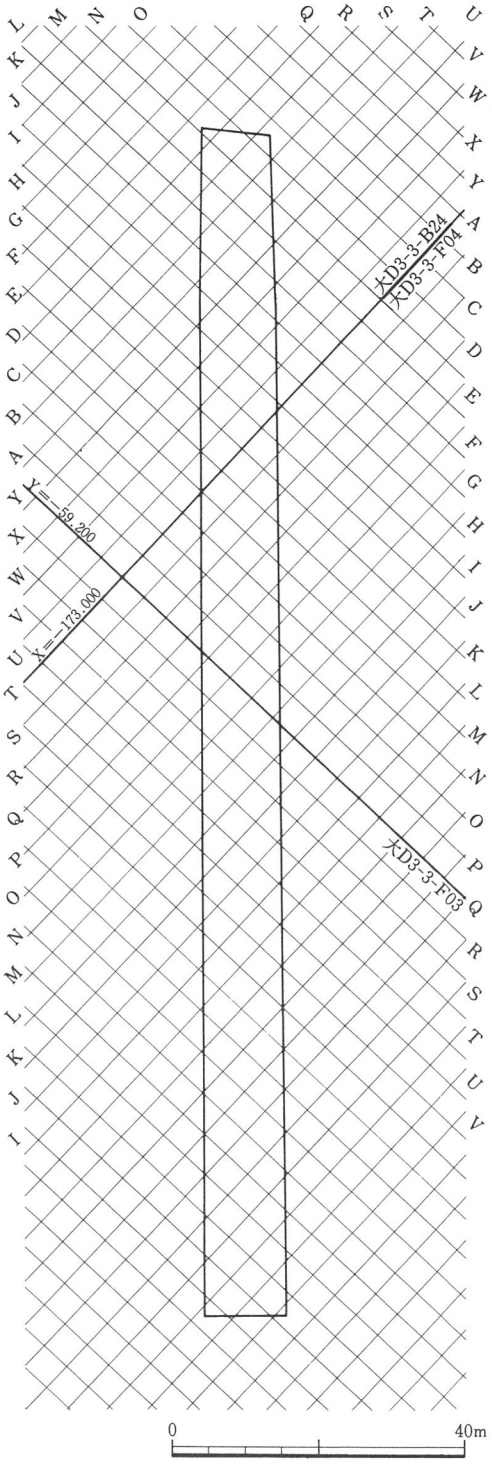
調査地は、調査時点まで畑乃至は水田として利用されており、若干の高低差をもっていた。調査に際しては、耕作土及び床土のみ重機で掘削し、それ以下は人力による掘削を行い遺構の検出に努めた。尚、検出遺構に付した記号等は、当協会刊の発掘調査規程による。



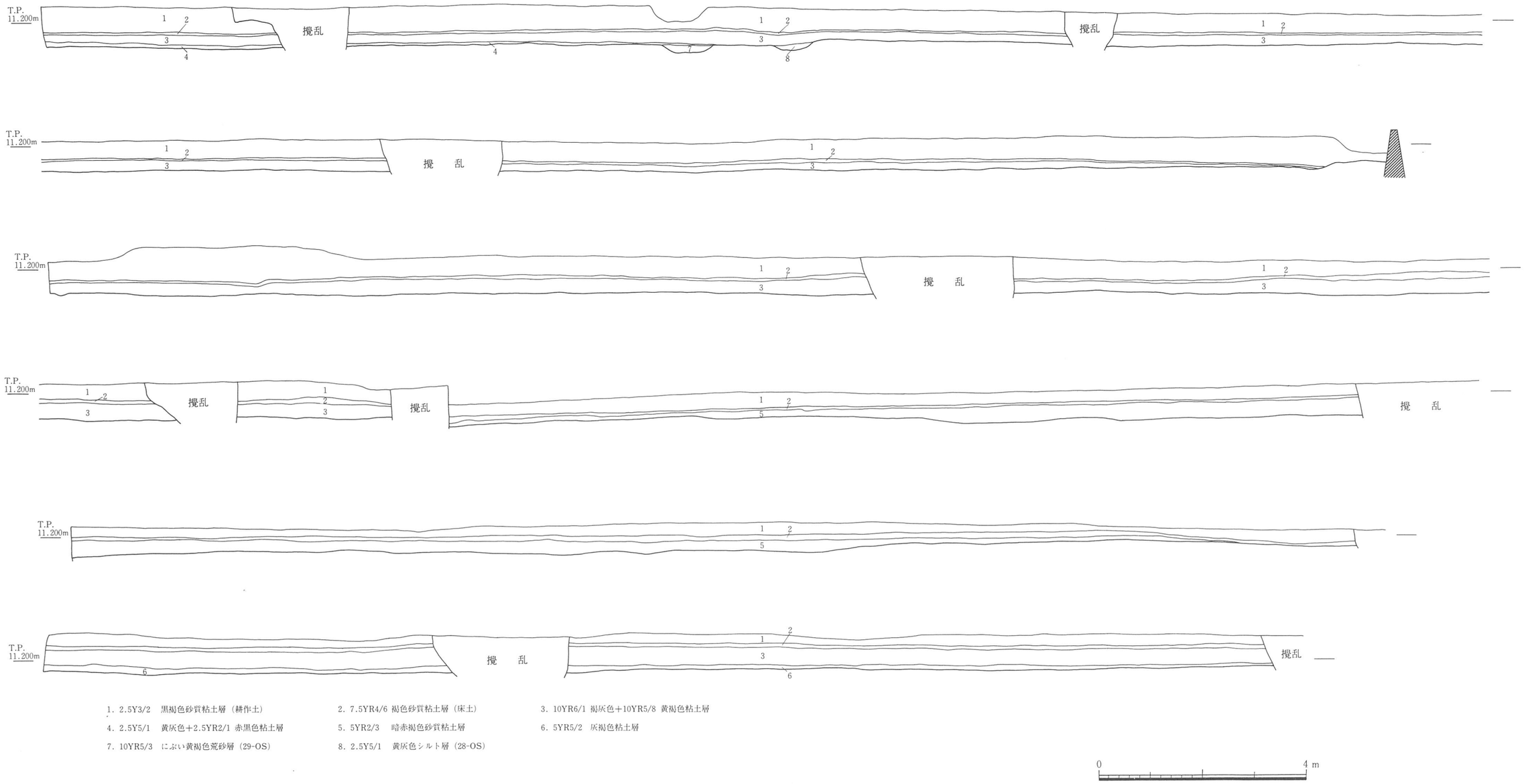

第２図　調査地位置図


0 1 2 3 4 5 6 7
O N M L K J I H G F E D C B A
0 8 km


A B C D
E G H
I J K L
0 1 km


L M N O Q R S T U
K J I H G F E D C B A Y X W V U T S R Q P O N M L K J I
V W X Y A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V
Y = −59,200
X = −173,000
大D3-3-B24
大D3-3-F04
大D3-3-F03
0 40m

第３図　調査地区割図




第４図　調査地セクション図

## 第２節　基本層序と遺物包含層出土遺物

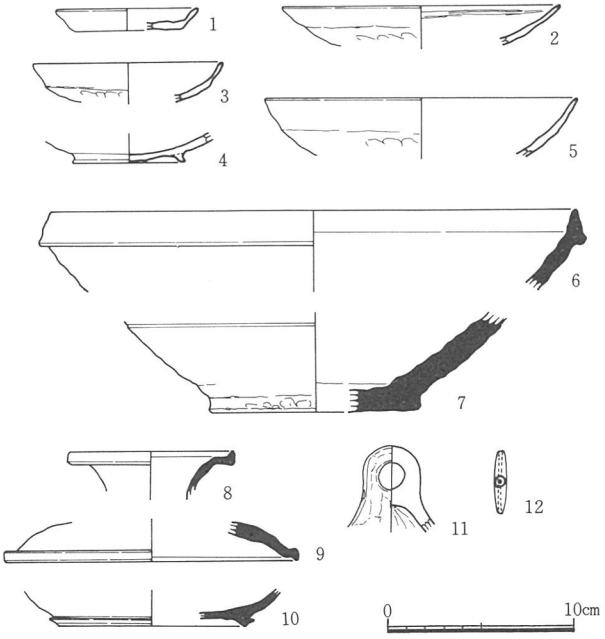
### １．基本層序

調査区全体を通じて、基本的な土層は同じである。上から第１層現耕作土、第２層床土、第３層旧水田堆積土、地山となる。第Ⅰ区では、第３層下に、微量の土器を含む灰褐色粘土層が約10㎝の厚さで認められる。第Ⅱ区では、第３層は瓦用の粘土として全て採掘され存在しない。よって第２層以下はすぐに地山となる。しかし地山は西側に緩傾斜し、上部に、暗赤褐色砂質粘土層の堆積がみられた。この層には、一点の遺物も包含されていない。第Ⅳ区では、南側のみ、黄灰色＋赤黒色粘土層の堆積が観察されたが、この層にも遺物は包含されていない。

以上の様に、遺物包含層として確認し得るのは、第Ⅰ区第４層のみである。又、出土遺物の大半は、第３層旧水田堆積土からのもので、細片化及び摩滅が進み図示できるものは少なかった。

### ２．遺物包含層出土遺物

第４層及び旧水田堆積土から若干の遺物が出土した。第４層からは、奈良時代の須恵器杯・蓋や土師皿、瓦器椀、土錘などの中世の遺物が出土したが量は極めて少ない。旧水田堆積土からは、瓦器椀、土師皿などの中世土器が出土した。これらの遺物は13世紀から14世紀代のものを主体とし、器種構成も土師皿、瓦器椀などの日常雑器がその大半を占めているが土錘や蛸壺などの漁撈具も若干出土している。




第５図　遺物包含層出土遺物実測図

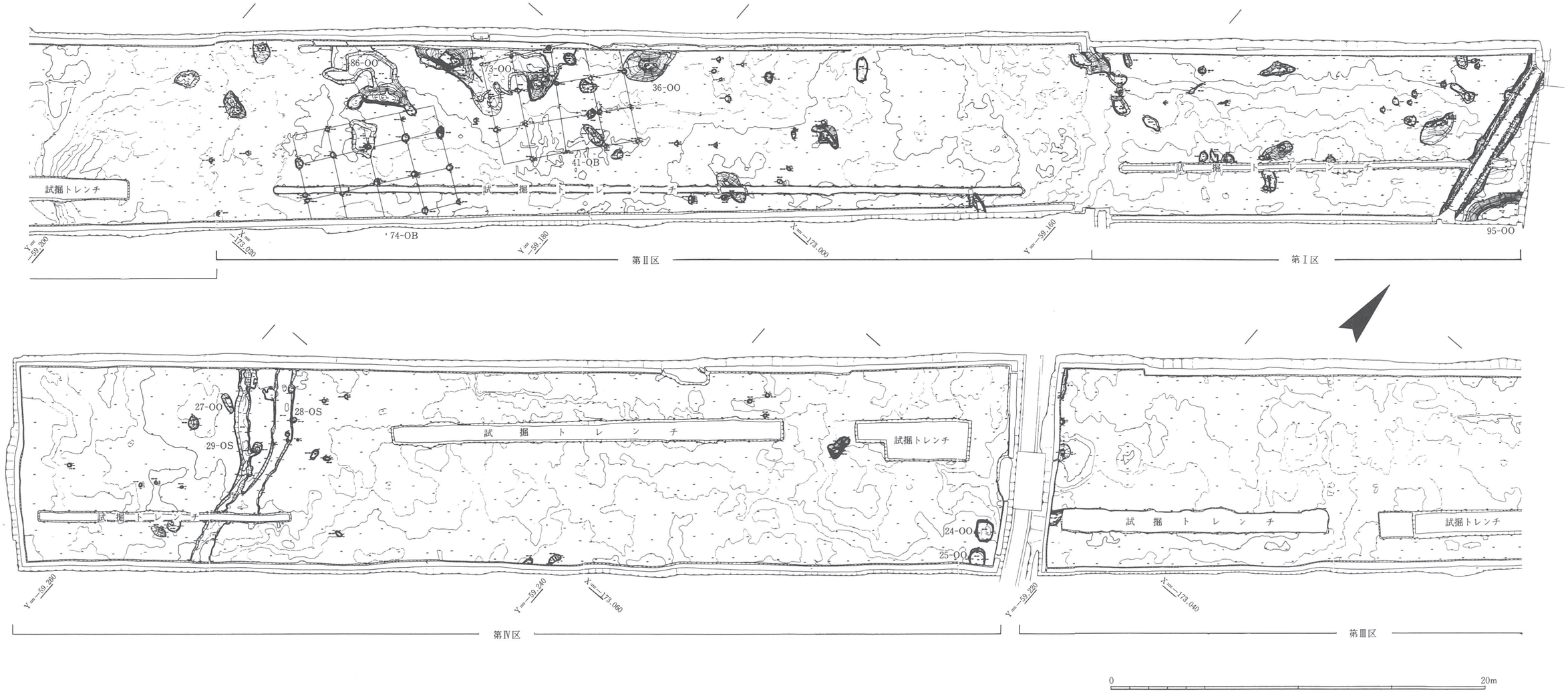
## 第３節　検出遺構と出土遺物

第Ⅰ区　第Ⅰ区では、不定形な土坑及びピット群を検出した。各土坑は、その平面形態が長円形を呈するものが多い。これらの土坑は、地山面において、その平面的な輪郭が不明瞭なものが多く、又、埋土も地山土へと徐々に漸移する様子を看取することが出来る。よってその掘り込んだ壁面を把握することも困難であった。これらの土坑の埋土には、褐色系の粘質土が堆積しており、中には地山土がブロック状に入り込む状況も認めることが出来た。ピット群は、調査区北東端に比較的まとまりをもって検出されたが、建物などとしてまとまりを有するものではなかった。

第Ⅱ区　第Ⅱ区はかつて瓦用粘土の採掘が行われているため、現状は周囲よりも一段低くなっていた。よって耕作土及び床土を除くとすぐに地山に達する状況であった。地山は、黄褐色の礫層で北側に向かい緩傾斜している。この緩斜面部に暗赤褐色砂質粘土層の堆積が広く観察されたが、この層には遺物は含まれていない。この層上面から掘り込むピットが検出された。これらのピットは、試掘調査時に確認されたピットと共に、３×４間の掘立柱建物２棟となることが明らかとなった。北側緩斜面部に堆積する暗赤褐色砂質粘土層を掘り進むと、不定形な土坑状の落ち込みになる部分が存在することが判った。36・73・86－ＯＯなどで黒褐色系の粘土及至はシルトが堆積している。埋土中には、地山上の大きなブロックが混入している部分が存在する。又、第Ⅰ区でみられた土坑同様、その壁面は不安定で、埋土は漸移的に地山へと変化していく。これら土坑内からは全く遺物の出土はみなかった。これら諸点から風倒木痕の可能性を考えている。

第Ⅲ区　瓦用粘土の採掘が行われていない為、第Ⅱ区よりも一段高くなっていた。旧水田耕作土を除き、地山面での精査を行ったが、遺構と呼び得るものはほとんど存在しない。僅かに、Ⅳ区との境部分で、土坑２基及び溝１条を検出したに留まる。両者共に埋土から遺物は全く出土していない。

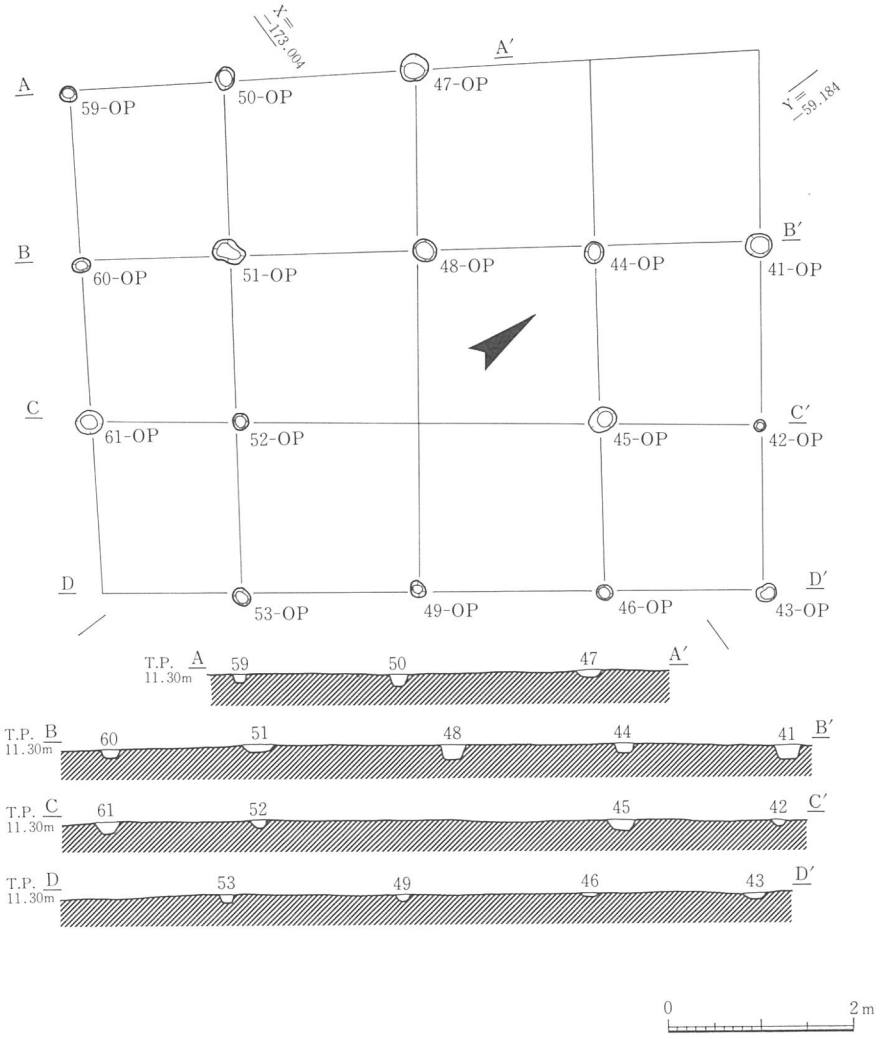
第Ⅳ区　第Ⅳ区では、土坑数基、ピット、溝などを検出した。24・25－ＯＯは楕円形を呈する土坑で、深さ20～30㎝ほどを計る。埋土は現耕作土に近似する黄灰色～暗灰色の粘質土が堆積している。埋土中より近世以降の染付、瓦などが出土している。28・29－ＯＳ周辺からは、土坑及びピットが比較的まとまって検出された。27－ＯＯの埋土は極暗褐色粘土層で、摩滅した土師器細片が若干出土した。それ以外の遺構からは遺物は出土していない。以下、検出した主な遺構について説明を加えておきたい。


86-OO
73-OO
36-OO
41-OB
74-OB
95-OO
試掘トレンチ
試掘トレンチ
試掘トレンチ
試掘トレンチ
Y=-59.200
X=-173.020
Y=-59.180
X=-173.000
Y=-59.160
第Ⅱ区
第Ⅰ区
27-OO
28-OS
29-OS
試掘トレンチ
試掘トレンチ
試掘トレンチ
24-OO
25-OO
試掘トレンチ
試掘トレンチ
Y=-59.260
Y=-59.240
X=-173.060
Y=-59.220
X=-173.040
第Ⅳ区
第Ⅲ区
0
20m

第６図　遺構全体図

41－ＯＢ

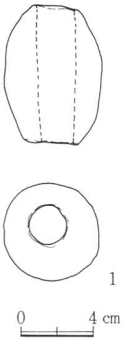
第II区では２棟の掘立柱建物が検出されたが、その内の北側に位置する建物跡である。梁行３間、桁行４間の規模を有し、総柱である。後世の造成や粘土採掘のため削平を被っており、各柱穴は浅いものが多い。よって柱の内４本は、その痕跡さえも留めていなかった。各柱穴掘り方は、ほぼ円形を呈し、直径20㎝前後のものが多い。柱穴は、断ち割りを行った結果でも柱痕跡を確認することは出来なかった。柱穴芯々間の距離は、1.74m～2.06mまでで約30㎝ほどの差を有しているが、全体としては、1.9m前後にその集中が認められる。柱穴内には、褐灰色～灰黄褐色系のシルト質土が認められた。柱穴の内いくつ




第７図　41－ＯＢ平・断面図

かからは、瓦器、土師器の細片が出土したが、図示し得るものはなかった。50－ＯＰからは、重量190.4ｇを計測する土師質の土錘１点が出土した。

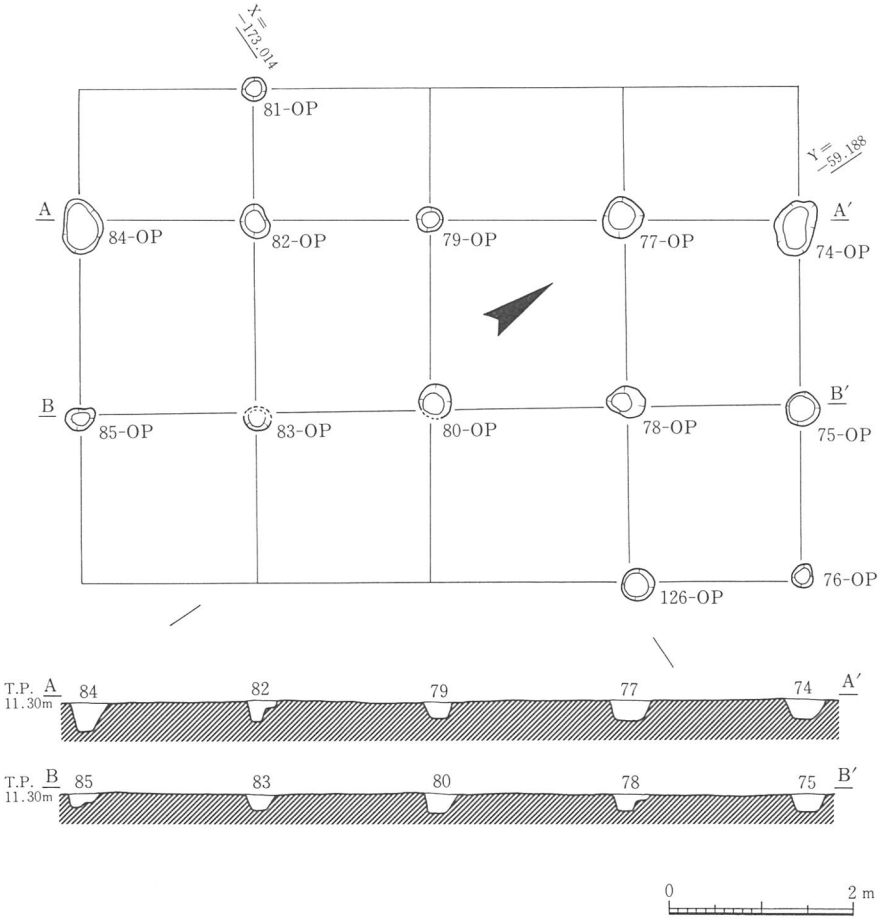
建物の平面積は、約39.9㎡、桁行方向は、Ｎ－37°－Ｅにとっている。



第８図　50－OP
出土遺物実測図

### 74－ＯＢ

41－ＯＢの南側に隣接して検出された総柱の掘立柱建物である。梁行３間桁行４間の規模を有する。41－ＯＢ同様、粘土採掘の影響を受け、柱穴の遺存状況は良好とは言えない。柱穴の約1／3が既に消滅しており、検出できなかった。各柱穴の掘り方は、ほぼ円形を呈し、直径約30㎝前後である。各柱穴から柱痕跡を検出することはできなかった。柱穴芯々間の距離

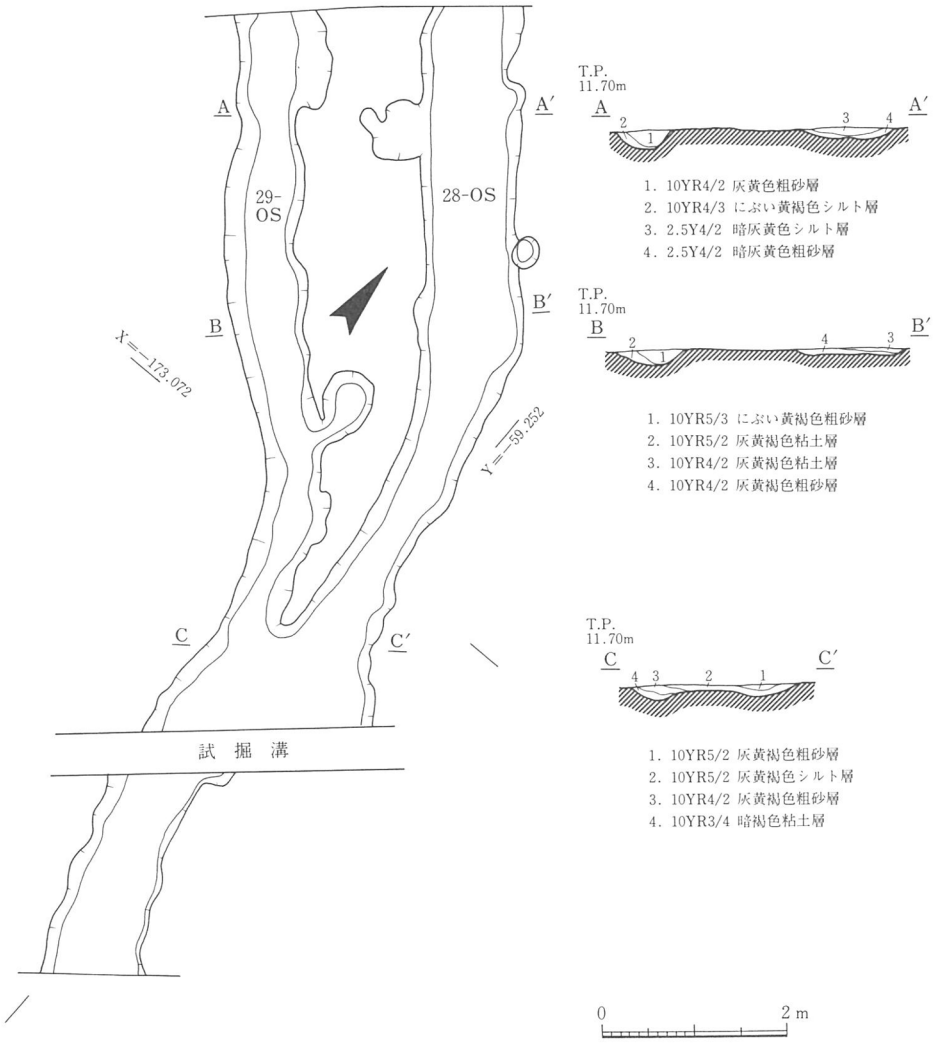


第９図　74－ＯＢ平・断面図

は、1.45m～2.0mを計測し、約50㎝ほどの差を有しているが、全体としては、1.9m前後にその集中が認められる。柱穴掘り方内は、褐灰色～灰黄褐色系のシルト質土が認められた。これら柱穴内埋土の色調及び土質は、41－ＯＢ柱穴埋土と非常に良く似ている。柱穴のいくつかからは、若干の土師器・瓦器の細片が出土したが図示し得るものはなかった。

建物の平面積は、約40.8㎡、桁行方向は、Ｎ－33°－Ｅにとっている。

次に41－ＯＢとの関係をみてみると、74－ＯＢは、若干の差は有するものの、41－ＯＢと同方位をとっている。又、両建物は、約2.9mの間隔を保ち、梁行方向と平行させて建てられている。柱穴埋土の特徴からも両建物は、同時併存の可能性が高いと考えられる。



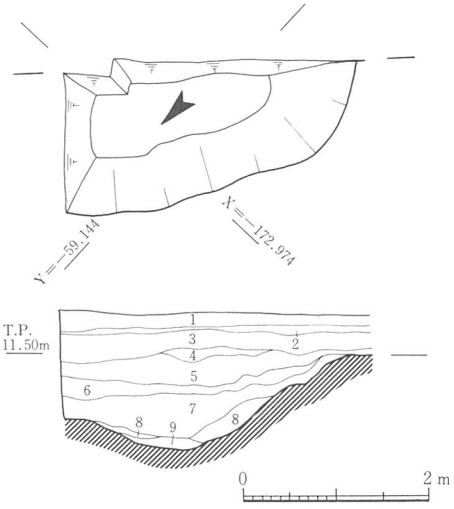

第10図　28・29－ＯＳ平・断面図

28・29－ＯＳ

調査区西端で検出された自然流路で、長さ約10mにわたり検出した。調査区を南北方向に横断する様にその流れをとり、その途中から２条の流路に分岐している。南北共に調査区外にまで延びることが、調査区の断面観察より確認できる。溝幅は、部分により多少の差を有している。狭い部分で約0.6m、広い部分で約1.0mほどである。２条の流れに分かれる部分では、特にその幅が広く、約2.4mを計測する。深さは約10～20㎝ほどで、その断面形は緩やかなＵ字形を呈している。底面は、部分的に平坦となっているカ所も認められる。

埋土は、29－ＯＳでは、上面を灰黄褐色の粗砂層が覆い、下層に、暗褐色～黄褐色系の粘土もしくはシルト層の堆積がみられる。28－ＯＳでは、上面に灰黄色系の粘質土が堆積しており、下層に、同系色の粗砂が認められた。粗砂の堆積からみて、比較的速い流れがあったと考えられる。

出土遺物は、29－ＯＳより、土師質土器２点及びサヌカイト剥片１点を検出した。しかしながら、この土器も細片かつ摩滅が激しいため、器種・時期などを特定することはできなかった。




第11図　95－ＯＯ平・断面図

95－ＯＯ

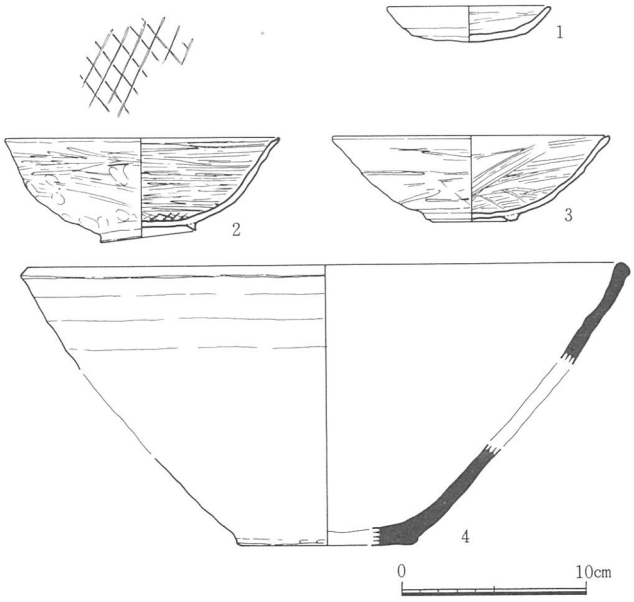
調査区の西端で検出された大型の土坑である。その大半が調査区外にあるため、全体の形状を知ることが出来ない。検出した部分の上端は緩やかな弧を描いており、円形を呈するものと仮定すると、その円弧より復元して、直径約4.0m弱の規模を有することになる。検出部分の断面形は、ロート状の緩やかな斜面をなしており、その形状から井戸の可能性も有している。しかし調査部分が全体の1／4程度と推定されるため、井戸枠等、井戸と断定し得る要素に欠ける。

埋土は、褐灰色系のシルト層が堆積していた。特に底面に近い部分には、拳大の円礫が多く含まれていた。

遺物は、第５～７層から出土したが、第７層からの出土が最も多かった。出土した遺物には、瓦器椀、土師器皿、須恵質鉢・甕などが認められる。

瓦器小皿（１）は、口径9.0㎝、器高2.0㎝で、燻しが不十分であるため、色調は灰白色を呈す。調整は外面口縁部及び内面をヨコナデ、内側面に若干のミガキの痕跡が認められるが、外面体部はヨコナデを二度に渡って施した為、体部に段を有する。瓦器椀には、口径15.0㎝、器高5.6㎝のもの（２）と、口径15.2㎝、器高4.7㎝のもの（３）がある。前者は、やや丸みを帯びた体部に外反する口縁部を有するもので、外面口縁部をヨコナデし、体部には横方向に指腹部による圧痕が並ぶ。内面は体部、見込み部をナデののち、内側面にやや太めのヘラミガキを施す。また、見込み部の暗文は、斜格子状に施されてはいるがミガキの一本一本は極めて細く内側面のミガキとは施文原体が異なるか、もしくは同一の原体であっても使用面が異なるものであろう。後者は、やや直線的な体部に外反する口縁部を有するもので、口径の割りには器高の浅いやや偏平な形態のものである。内、外面の調整は基本的には、前者と同様ではあるが見込み部の暗文は内側面のミガキとほぼ同様の太さであり、また、前者の高台の形状が断面逆三角形を呈するのに対し、後者は逆台形である。摺鉢（４）は、口縁部の小片と底部片のみの出土で、胎土や色調から同一個体と推定されるものである。推定口径32.2㎝、底径9.8㎝で、須恵質の灰白色を呈するもので、恐らく東播系の製品であると考えられる。体部に若干丸みを帯び、口縁端部は外側にやや肥厚する。

これらの遺物の時期であるが、出土瓦器椀は尾上編年Ⅱ－２・３期に相当し時期的には12世紀中頃から後半に位置づけられており、東播系摺鉢は12世紀前半に位置づけられているものの近年の傾向では瓦器椀の時期と同時期と考えてよかろう。




第12図　95－ＯＯ出土遺物実測図

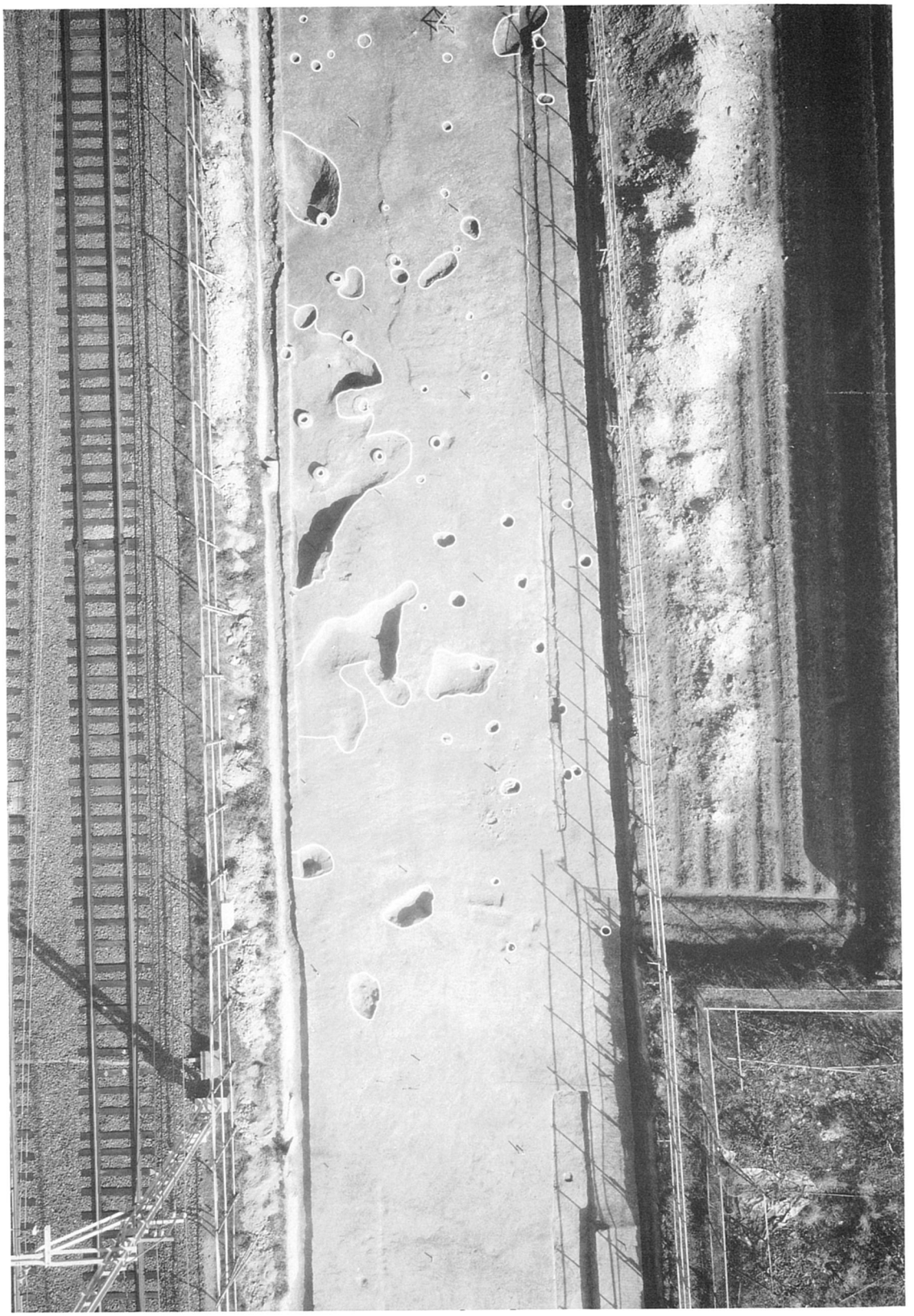
# 第Ⅳ章　ま　と　め

加治・神前・畠中遺跡の調査結果について、前章まで事実関係を中心に記述を進めてきた。今回の発掘調査では、掘立柱建物２棟、土坑、溝、ピットなどが検出された。これら遺構の密度は、調査区の北東方向に高く、南西方向で稀薄となる。各遺構からは、遺物の出土が極めて少なく、時期を決定し得るものが少ない。その中で95－ＯＯからは、比較的まとまった遺物が出土している。瓦器椀などからみて12世紀後半の年代を与え得る。41－ＯＢ及び74－ＯＢは、梁行３間、桁行４間の掘立柱建物で、ほぼ同規模である。この２棟の建物は、約29ｍの間隔をもち、梁行方向を平行させて建てられている。又、柱穴の埋土は、いずれも、褐灰色～灰黄褐色系のシルト質土で酷似する。これらの諸点から、この２棟は、同時併存の可能性が高いと思われる。又、前述の95－ＯＯについても、その埋土は褐灰色系のシルト質土で、建物柱穴埋土に近似している。よって時期を決する遺物を欠くもののこれら２棟の建物も12世紀後半代に帰属する蓋然性が高いと考えている。第Ⅰ・Ⅱ区では、不定形な土坑を数多く検出した。これらの土坑は、いずれも平面プランが不明瞭で、埋土も、地山へと漸移的に変化し、不安定である。その埋土は、黒褐色系の粘質土が堆積し、地山土をブロック状に含む特徴を有する。遺物は全く包含されていない。これらから観て風倒木痕と考えられる。尚、41－ＯＢは、これら土坑を切り込んで建てられており、土坑群は、建物に先行するものである。

第Ⅰ区の遺物包含層からは、中世の土器と共に奈良期の須恵器が若干出土している。当該期の遺物は、第Ⅱ～Ⅳ区では出土しておらず、調査区北西部に偏る。第Ⅱ～Ⅳ区には明瞭な遺物包含層は存在せず、遺物は全て旧水田堆積土層より検出した。何れも磨滅・細片化が進んでいる。時期的には、13世紀前葉から14世紀中葉までのものを含んでいる。

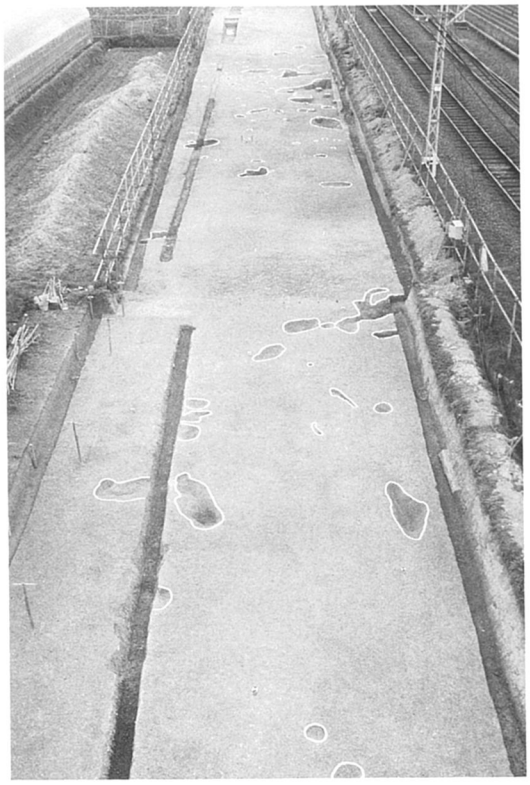
以上の様に、今回の調査地は、中世期において遺構は稀薄で、遺跡の中心からは離れていると言える。この点は、出土した遺物量にも反映されており、総数でコンテナ１箱程度であった。

# 図　　版

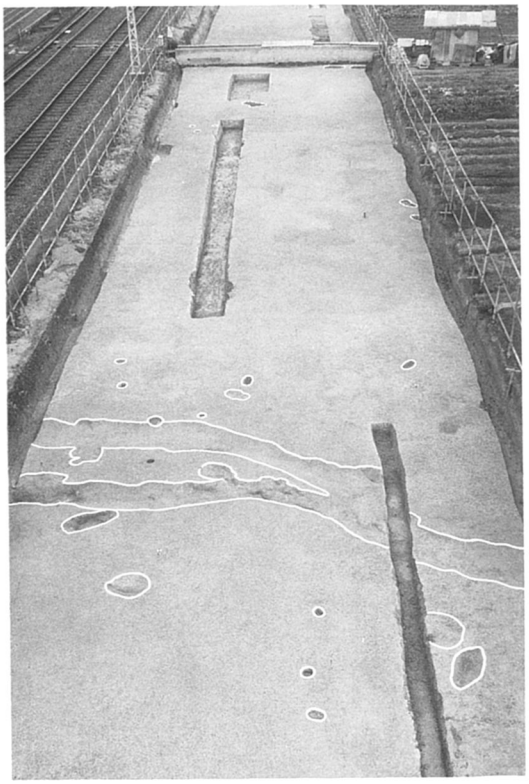


第Ⅱ区全景

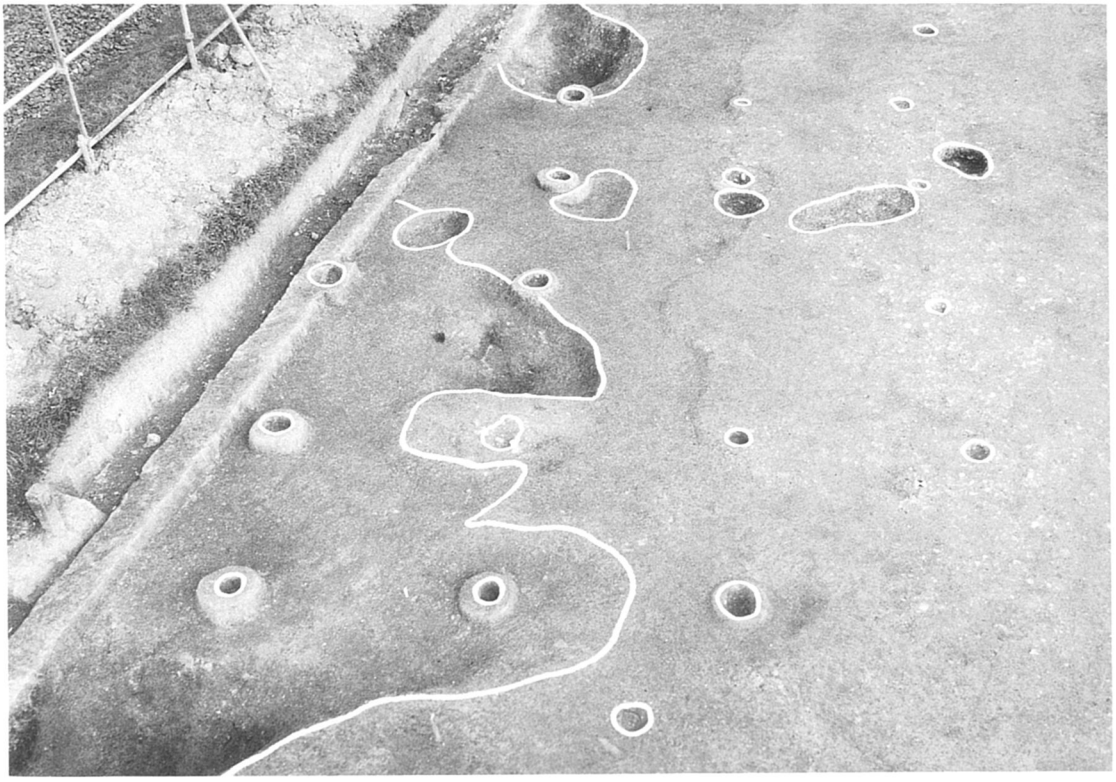
1．調査区全景（南より）



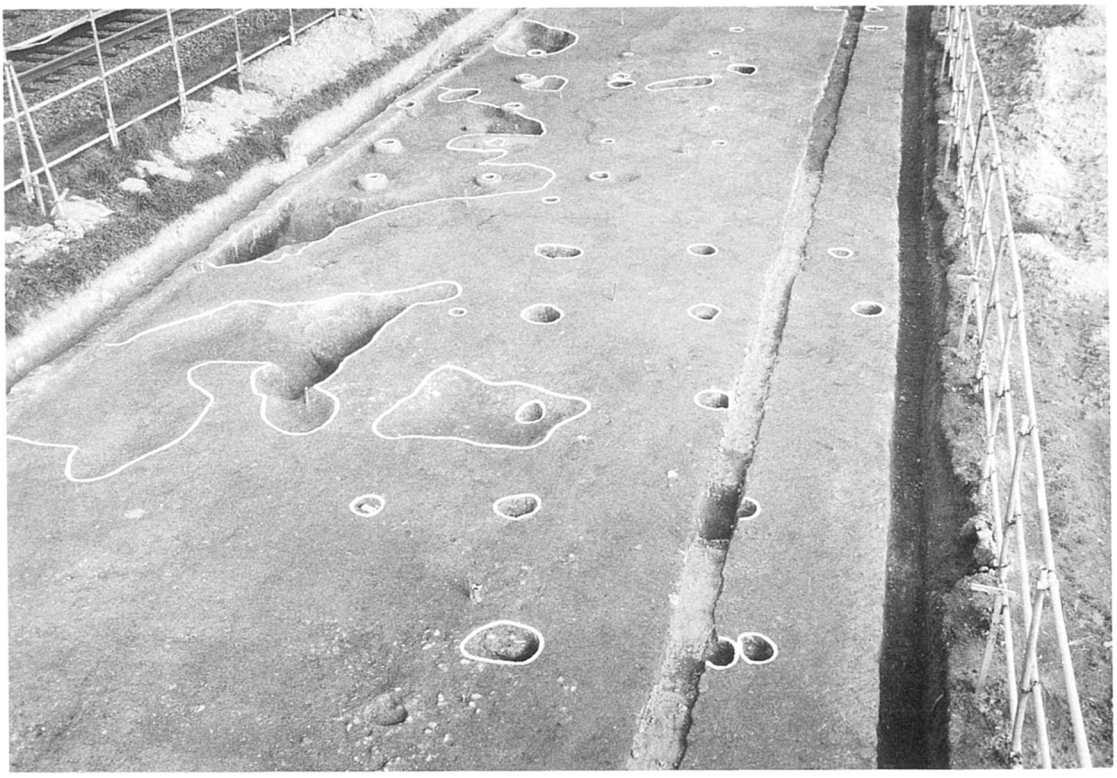
2．調査区全景（北より）



3．調査区全景（南より）



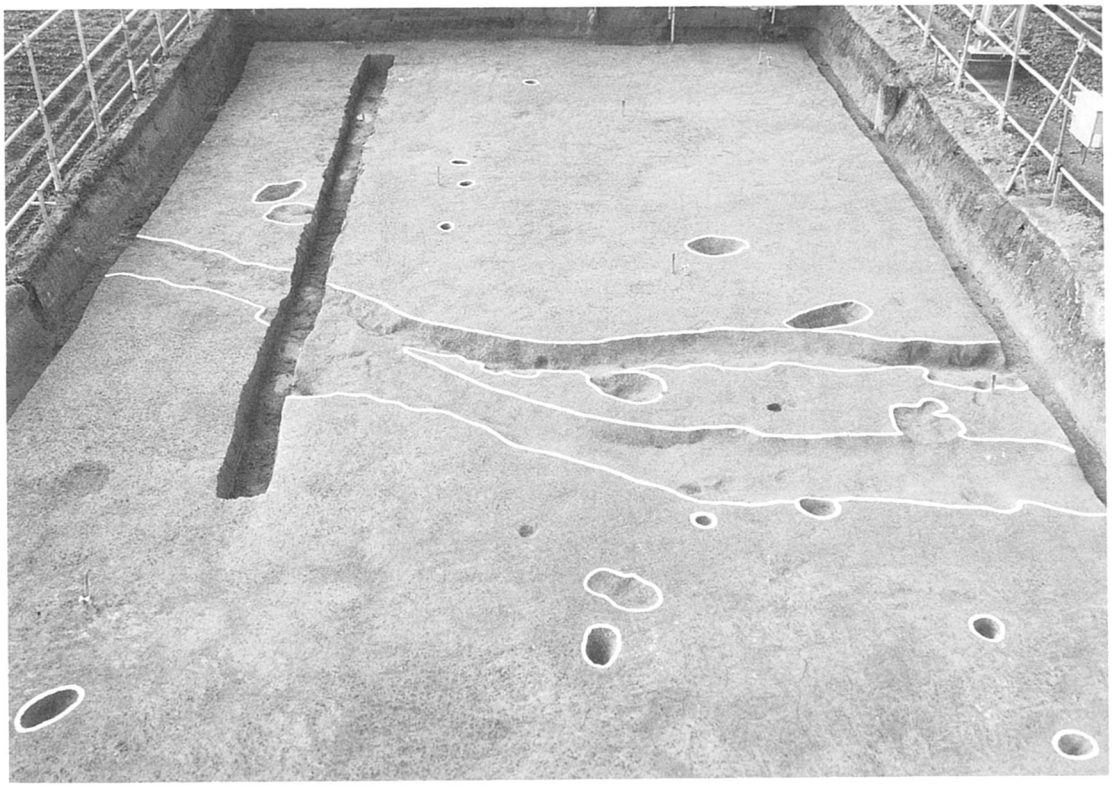
1．41—OB全景（南より）



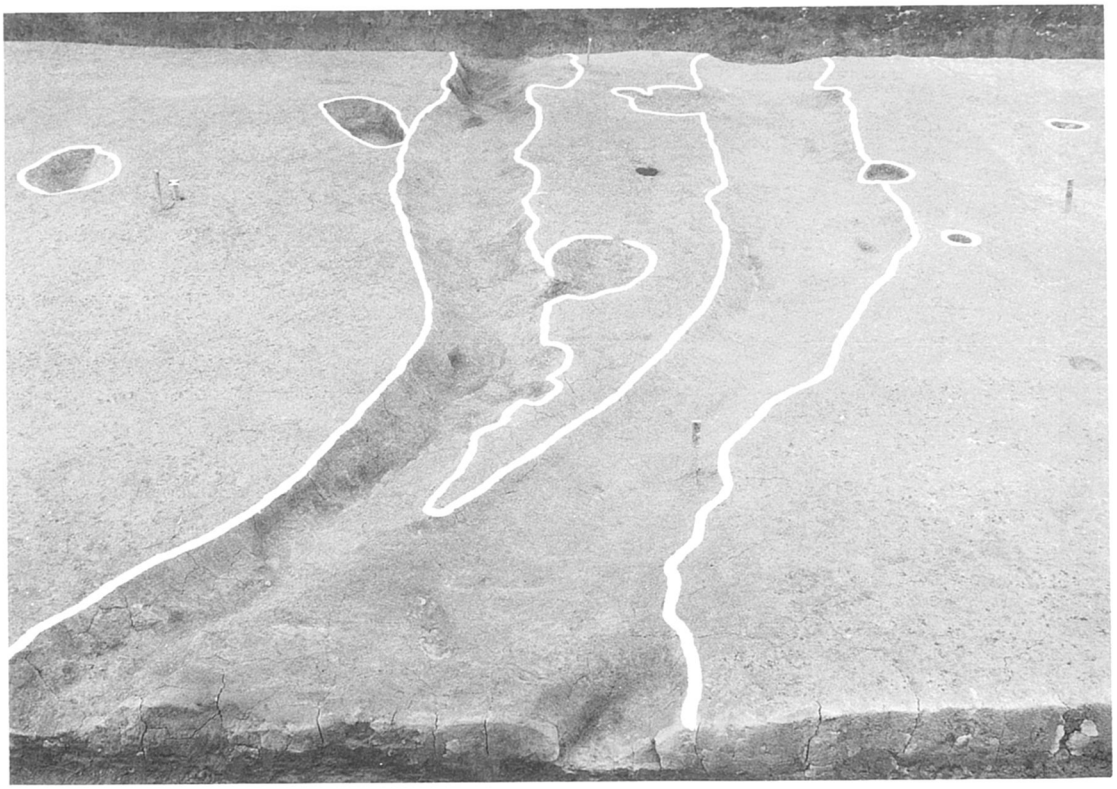
2．74—OB全景（南より）

1．95—ＯＯ全景（西より）

2．95—ＯＯ土層断面

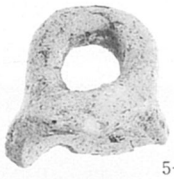


1．28・29—ＯＳ全景（北より）



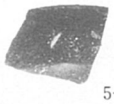
2．28・29—ＯＳ全景（東より）

5-8


5-11

5-10

5-9


5-5

5-2

5-6

5-1

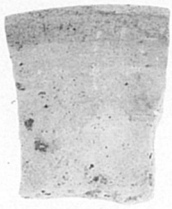
5-3

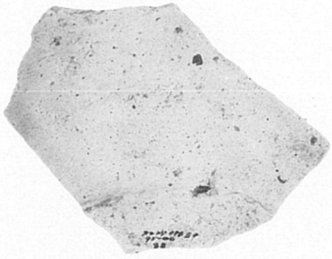
5-4

5-7

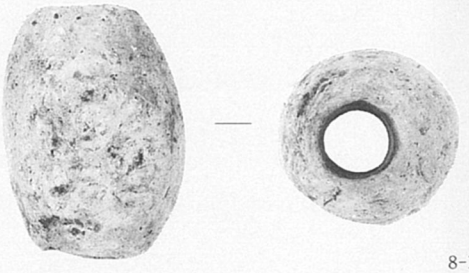
12-2

12-3




12-4

12-1


8-1

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第66輯

# 加治・神前・畠中遺跡

都市計画道路貝塚中央線に伴う
南海単独立体交差化事業に伴う発掘調査報告書

1991年3月31日

編集・発行　財団法人　大阪府埋蔵文化財協会
大阪市中央区谷町2丁目2番20号　大手前ウサミビル

印　　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所